

シノプシス

1. タイトル “Mizz Goodie 2 Shoez”
日本語仮タイトル 『ミス・グディー２シューズ』

2. 書誌情報

出版社 : AuthorHouse
刊行年度 : 2012 年
ページ : 24
I S B N : 978-1-4772-9475-8 (sc)
978-1-4772-9476-5 (e)

3. 著者紹介

シャーロレッタ “チャーリー” ・アンダーソン (Charoletta Anderson)

テキサス州ヒューストン出身の児童書作家。敬けんなキリスト教徒で音楽家として活動する両親のもとで育った。シャーロレッタ自身もゴスペル歌手で、バックコーラスを担当したり、他のアーティストたちの前座を務めた経験がある。『ミス・グディー２シューズ』は、既成概念にとらわれないのが作家だというシャーロレッタの考えから誕生した。そして二人の娘さんたちにとって、母親のシャーロレッタが彼女たちのミス・グディーである。

4. イラストレーター紹介

レスリー・ピント (Leslie Pinto)

フロリダ州マイアミビーチを拠点に活躍するアーティスト。子どものころからアートが好きで、大学ではグラフィック・デザインを専攻。その後企業でデザイナーとして仕事をしてきたが、フリーランサーとして2012年に独立。以来、大好きな絵本の挿絵の仕事で成功している。

5. あらすじ

ミス・グディー２シューズ (Mizz Goodie 2 Shoez)

この絵本の主人公はクツのミス・グディー2シューズ。毎日とっても楽しいクツ人生を送っているんですって。クツは色とりどりで、サイズも形も高さもさまざまです。クツ専用のおうちだってあるんです。でもそれをげた箱とか呼ばれるのが、ミス・グディーはちょっと気に入らないのかもしれない。彼女は自分がクツであることを自慢に思っています。だって、クツをはかない人とかクツの要らない人とかいないでしょう？ だからミス・グディーはクツがとっても特別な存在に思えるんです。

ミス・グディーにはわからないことがあります。人ってなんで自分より小さいサイズのクツを、無理にはこうとするのかしらって。「入らないもんだから、あっちこっち引っ張ったり伸ばしたりでそりゃもう大変なんだから。それに、毎朝起きると必ずクツ友がひとりいなくなってるのも不思議だわ」

女の人には女友だちがいるけれど、クツの世界にいるのはクツ友です。ミス・グディーには個性的なクツ友がたくさんいます。ミス・テニスシューズは布製で汗っかき。いつも汚れています。ミス・ストレッチはおどろくほど細くて高いヒールをして、いつもとてもおしゃれでスマートです。ミス・ストレッチブーツもやっぱり高いヒールをしているけれど、彼女の妹は{アングル/足首}までの高さしかないから、ミス・アングルブーツって呼ばれています。ミス・バレリーナは怪我をして入院してしまい、その間ミス・グディーはおうちでミス・スリッパと仲良くしていました。ミス・スリッパといると、とてもくつろげるんです。女の人の中の最高の友はダイヤモンドではなくて、クツだというのがミス・グディーの持論です。

いじめっ子 (Mizz Goodie 2 Shoez in “No Shoe Bullying”)

朝起きると、ミス・グディーはその日が新学期初日だったことに気がついて、とっても緊張してしまいました。もう朝食を食べる時間ありません。学校に着いて教室に入るとミス・ストレッチとミス・テニスシューズに言いました。「ランチは一緒に食べようね」

ランチの時間、ミス・グディーたちのまえを通るだれもがミス・テニスシューズのことを笑います。彼女が臭ってちょっとばかり汚れているからのようですが……。かわいそうなミス・テニスシューズは、泣きながらテーブルから離れてしまいました。意地悪なミス・ストレッチブーツと妹のミス・アングルブーツの仕業です。でも、大丈夫。ミス・グディーがみんなを叱って、いじめをやめさせてくれました。

どしゃ降り (Mizz Goodie 2 Shoez in “When It Rains, It Pours”)

今日はなんだかうっとうしいお天気ね、ミス・グディーは思いました。「こんな日にはお出かけなんかしないで、みんなでおうちにいるのがいいわね」なのに、げた箱が開いて取り出されたのはなんとミス・グディーです。ついてないけど、きっといつも彼女がピカピカきれいになっているから選ばれたんだでしょうね。こんな日に出かけて、病気になったり汚れたりするのは

イヤなんだけど、ミス・グディーはがんばってお仕事します。でないと、いつお払い箱にされるかわからないから。外を歩いていると、雨が降り出しました。でも雨にぬれながら、水溜りの中を出たり入ったり。ミス・グディーはがんばります。前なんかぜんぜん見えなくて、もうびしょぬれ。生まれてこのかた初めてクシャミをしました。クツがクシャミするなんて知らなくて、自分でもびっくりです。早くおうちに帰って休みたいミス・グディーだけど、どうやら長い一日になりそうです。

6. 分析・感想・評価

ちょっと派手で楽しそうな表紙に惹かれて、思わず手にとってしまうようなこの本はクツの話です。主人公はクツのミス・グディー。グディーは茶目っ気たっぷりでおしゃれなクツです。クツとして生きる流儀もしっかり持っていて、正義感がとっても強いのです。個性なんてマチマチですから、背が高いとか低いとか、形がどうか、どこのブランドだとか、そんなの全然関係ないのです。いじめっ子がいると、クツ同士みんな仲良くするの!!!と鼻息も荒くクツ友たちを仲良くさせてしまいます。

絵本といえど、とても奥が深いお話です。子どものために書かれたこの本は、みんな平等なのだ、わたしたち大人にも再認識させてくれるでしょう。とにかくクツが大好きで、クツなら買わずにいられない女性はけっこう多いかもしれません。そんな方にはぜひ読んでもらい、ことさらにクツが好きというわけではない方にも、お勧めの一冊です。わたしたちはこんなふうにクツを扱っているのだと気づきます。既成概念にとらわれないのが作家だと著者のシャーロレッタ・アンダーソンは言い、そこから生まれたのが『ミス・グディー』です。この本の感心すべき点は、著者のこの発想のユニークなところです。ミス・グディーがユーモアたっぷりに教えてくれるクツの世界。彼女はクツの視点で、わたしたちにどう扱われているかを教えてくれます。そしてわたしたちは、人間世界がクツ世界となんら変わらないことに気がつかされるのです。

ユーモラスなイラストも本の内容とマッチしており、小さな子どもたちなら絵に惹かれて、おとうさん、おかあさんにもっと読んでとおねだりするのかもしれませんが、もう少し年上の子どもたちには著者とグディーからのメッセージを読み取ってもらいたいものです。でもまずは、この本を読んだ子どもたちにとって、きっと、読書する楽しみを学ぶきっかけになることでしょう。